

**【保育実践論文(ソニー幼児教育支援プログラム) 審査講評】**  
**2018年度 最優秀園**  
**奈良市立鶴舞こども園**

本園は、まず社会の変化をしっかりと捉えることから出発しました。科学技術の進展によって、AI（人工知能）が人知の一部を超えたり、子どもたちを含む人間がバーチャル（仮想現実的）な世界に没頭したりするようになった現況を直視しました。そして、今こそ幼児期には、「豊かな感性」と「高い創造力」の育ちが大切であると感じて、子どもたちの「創造的なひらめき」（機械にはできない人間らしさ）に注目しました。特に、「よいもの」への憧れや追求心が「創造的なひらめき」の源泉であって、「科学する心を育てる」上での重要な出発点だと考えました。子どもの「いいを形作る過程」を明らかにしていくことは、従前にはない独創的な視点です。

詳細な記録に基づいて、子どもたちの「いい」に込められた思いを捉えました。さらに、日常的な保育カンファレンスの積み重ねにより、“子ども理解”を園全体で共有し、主題に繋がる保育の深耕と、その質の向上に努められていることが分かります。

「いいがぶつかり合う」「確実なよりいいものにする」「いいを開拓する」などの、子どもの「いい」の深まりを捉えたことに新鮮さがあります。加えて、同じ活動をしている場面にも、丁寧な観察と考察によって、一人一人の「いい」には違いがあることを明らかにするなどの研究成果が具体的に示されています。

さらに、「いい」が生まれた要因である「その前に」に注目したことにより、「創造的なひらめき」に至る先行経験や、その後の展開である「いいを形作る過程」、そして、子どもの変容の背景がより明確になりました。

これらの省察の積み重ねによる一人一人の“子ども理解”を、子どもの視点に立った保育者の援助や、保育環境の創意工夫に繋げています。

「いい」ものと出会い、それを大切にする3歳児の姿も捉えられています。そして、年齢が上がるに連れて、「いい」ものとの関係の深まりや、探究のプロセスが増えて行きます。さらに、困難に出合っても試行錯誤や予測、検証などを行いながら、友達との協働によって乗り越えていく姿からは、多くの「科学する心」の育ちを読み取ることができます。

これらの「科学する心」を育てる保育の実践と研究は、他園にも大変参考になる取り組みであり、高く評価されました。

今後も、子どもたちが、豊かな自然を積極的に生かした遊びを広範に展開し、「科学する心」がさらに育まれることを願っております。